寝室の位置関係からみた住戸内ゾーン概念の提案

—ライフステージによる住み方変化の研究2—

A ZONE OF DWELLING UNITS ON THE RELATION OF BEDROOM POSITION

—The shifts of room-allotting in relation to life stages 2—

笠嶋 泰*, 今井正次**, 松本壮一郎***

Yasushi KASAJIMA, Shoji IMAI and Soichiro MATSUMOTO

This paper aims to propose a zone of dwelling units and make research on the relation between the zone and the time for children's separation or isolation.

The area of both LDK and bedrooms linking with LDK is defined as Open zone. The area not linking with LDK is defined as Closed zone.

The questionnaire on 764 samples in 17 planning types, 3LDK and 4LDK, shows results as follows.

Parents' bedroom is in most cases in Open zone through life stages. Children's bedroom is in Open zone at the early life stage, and in Closed zone at late life stage.

After isolation, children's bedroom is generally in Closed zone, but this tendency declines according to the number of bedrooms in closed area, children's sex and so on, they cope with it by using each zone properly.

Keywords : *dwelling units, life stages, open zone, closed zone, bedroom position*

住戸, ライフステージ, オープン域, 隔離域, 寝室位置

はじめに

本研究は、近年の住戸規模拡大傾向に伴う部屋数の増加傾向¹⁾、諸室の分断化・閉鎖化傾向²⁾、定住に対する居住者意識の変化等、住宅の内外にわたって起こりつつある変化を踏まえ、単純家族のライフステージごとの多様な住要求に対応できる住戸計画の指針を得ようとするものである。

本報は、この「ライフステージによる住み方変化の研究」において、集合住宅の各種住戸平面と就寝分離・分解時期との関係を扱った第1報³⁾に続くものである。

1. 目的と方法

1.1 目的

第1報では、3~4就寝室⁴⁾をもつ公私室分離⁵⁾の考えに沿って計画されたと思われる平面において、住戸平面と就寝分離・就寝分解時期(以下分離・分解時期と略記)との間に関係があることを確認し、分離・分解時期に影響を与える平面的要素として、部屋数、LDKの行燈・狭小性⁶⁾、および仮説ではあるが、同じ就寝室数の平面

でも、LDKと直接つながる就寝室の数等が考えられることを報告した。LDKの行燈・狭小性は間接的に就寝室の数を減ずることに通じ、結果的に分離・分解時期を遅らせるものと考えられる。

本報は、このLDKと直接つながる就寝室とLDKとからなる住居内の空間を新しいゾーンとして提案し、このゾーンの分離・分解に対する意味を、居住者の意識およびライフステージ上での親子の寝室位置変化からとらえることを目的とする。

1.2 既往研究

分離・分解時期とLDKと直接つながる就寝室の数との関係を考察した研究は、現在のところほとんど見いだせない。わずかに、寝室分解の難易の差が、主寝室と副寝室とのつながり方と関係することを指摘した論文が⁷⁾みられる程度である。

しかし、この論文は、いわゆる「K系列」「DK系列」の平面を対象としており、3~4就寝室をもつ公私室分離の考え方に沿って計画されたと思われる「nLDK」平面を対象に、分離・分解時期とLDKと直接つながる就

* 大同工業大学 助教授・工修

** 三重大学 教授・工博

*** 愛知工業大学 助教授

Assoc. Prof., Daido Institute of Technology, M. Eng.

Prof., Mie University, Dr. Eng.

Assoc. Prof., Aichi Institute of Technology

図-1 対象住戸平面のO域K域

寝室の数との関係を考究した研究は現在のところ見いだせない。

1.3 研究方法

本報の目的である「分離・分解時期とLDKと直接つながる就寝室の数は関係する」という仮説を検証するために、本論を以下の手順で進めることとする。

まず始めに、LDKと直接つながる就寝室とLDKとからなる住戸内の空間を新しいゾーンとして提案し、

① 分離・分解時期と新しく提案した住戸内のゾーンとの関連性を、居住者の意識の面からみるために、部屋割り理由とライフステージとの関係进行分析する。

② 親と子供が同室で就寝する時期から就寝分離する時期までを対象に、親と子供の寝室位置関係がライフステージ上でどのように変化するかをとらえ、親と子供の寝室位置関係変化の実態から新しく提案したゾーンの意味を考察する。

③ 上記の新しく提案したゾーンを指標に、就寝分離に至るまでの過程に含まれる住み方事例⁸⁾ばかりでなく、就寝分解後の住み方事例を対象に、それぞれ親と子供の寝室位置関係がライフステージ上で②③でみた変化傾向と同様であるか否かを検証する。

調査方法、調査年月、調査対象住戸、アンケート回収数、居住者属性等は第1報に記したので、本報では省略する。また、本報での考察対象住み方事例は、1924の全住み方事例からCc, B, S⁹⁾、および母親と子供は同室で、父親だけが別室で就寝する主人別室就寝型の住み方事例を除いた事例とする¹⁰⁾。

図-2 O・K域概念図

なお、以下調査対象住戸の名称を、簡略に表現するために、図-1の各欄に記した名称で記すこととする。

1.4 オープン域と隔離域の定義

本報は、LDKと直接つながる就寝室の数が分離・分解時期とどういう関係にあるのかを考察することを目的としているが、図-2のごとく、このLDKと直接つながる就寝室およびLDK自体から成る一連の空間をオープン域（以下、O域と略記）と、またLDKとは廊下等で連結され、LDKと直接つながらない住戸内の空間を隔離域（以下、K域と略記）と定義する。

調査対象住戸それぞれのO・K域を表すと、図-1のようになる。

2. 部屋割り理由とライフステージ

ここでは、O域が分離・分解時期とどのようにかわるのかを、部屋割り理由のライフステージ上での変化からとらえる。考察対象は、子供寝室の位置に対する要求が子供の中で最も端的に現れると思われる長子の部屋割り理由を対象とする。

なお、部屋割り理由の分析に使う資料は、部屋割り理由の選択肢の中に、「親子の寝室を隣接させる」と「親子の寝室を離す」の項目が挿入されている'87年調査と'88年調査の9住戸平面（〈3新A〉〈3岩P〉〈3岩Q〉〈3桃A〉〈4共A〉〈4伝A〉〈4大A〉〈4池A〉〈4堀A〉）から得られたものを使用する。

2.1 ライフステージと長子室の部屋割り理由

図-3は、ライフステージと長子室の部屋割り理由を、南面2室型3LDK（以下、南2型3LDKと略記）、南面3室型3LDK（同南3型3LDK）、南面3室型4LDK（同4LDK）別にみたものである。

部屋割り理由のライフステージ上の変化をまとめると、南2型3LDKでは（図-3.1）、

① ライフステージの初期の段階では、「南側に確保したいため（以下、「南側」と略記）」、「親子の寝室を隣接させるため（同「隣接」）」、「和室（または洋室）としたため（同「和洋」）」の3項目が上位を占める。

② CK4、Cmf等家族成長の頂点の時期（以下、最成長期と言う）では、「親子の寝室を離すため（同「離す」）」、「南側」「和洋」の3項目が上位を占める。

南3型3LDKでは（図-3.2）、

① ライフステージの初期の段階では、「南側」「隣接」の2項目が上位を占める。

② 最成長期では、「南側」「離す」の2項目が上位を占める。

4LDKでは（図-3.3）、

① ライフステージの初期の段階では、「南側」「和洋」の2項目が上位を占める。

図3.1 南面2室型3LDKの場合

図3.2 南面3室型3LDKの場合

図3.3 4LDKの場合

図3.4 部屋割り理由変化のモデル図

図-3 長子室の部屋割り理由

② 最成長期では、「和洋」だけが他を上回る。

これら3つの平面グループに共通するライフステージ上の部屋割り理由をみると、ライフステージの初期の段階では「南側」「和洋」「隣接」が上位を占め、最成長期では「和洋」「離す」が上位を占める。

なお、部屋割り理由「LDKに近い（または遠い）ため」「便所に近い」「一番上等の部屋だから」「外の音がうるさい」「外から見られる」「その他の理由」の各選択肢は、各ライフステージでみても最大10%である。図-3.4は、選択されることが多い部屋割り理由のライフステージ上の変化をモデル的に表したものである。

2.2 「隣接」「離す」の意味

上記のごとく、長子室の部屋割り理由で注目される項目は、「南側」「和洋」「隣接」「離す」の4項目である。この内、前二者の意味するところは具体的で分かりやすいが、後二者の意味するところは定かでない。

そこで、長子室の部屋割り理由として「隣接」「離す」を選択した住み方事例について、親と長子の寝室位置関係をみることにする。

対象となる9住戸平面において、平面上選択可能な親と長子の寝室位置関係は、図-4に示した隣室型、居間介在型、隣廊型、廊下介在型の4パターンに親と長子が同室で就寝する親子同室型を加えた5パターンである。

表-1は長子室の部屋割り理由として「隣接」を、表-2は同様に「離す」を挙げた住み方事例を対象に、各住み方事例の親と長子の寝室位置関係が、この5パターンのうち、どのパターンであるかを住戸平面別に整理し

	隣室型	居間介在型	隣廊型	廊下介在型
モデル図				
備考	居間介在型の一つで、2就寝室が隣り合う場合を言う。	LDKを介して2就寝室を行きかい、就寝室が隣り合わない場合を言う。	廊下介在型の一つで、2就寝室が隣り合う場合を言う。	LDK以外の空間を介して2就寝室を行きかう場合を言う。

図-4 親と長子の寝室位置選択可能パターン

表-1 長子室部屋割り理由「隣室」事例における親と長子の寝室位置関係

	3新A	3岩P	3岩Q	3桃A	4共B	4伝A	4大A	4池A	4堀A	合計
同室型	19	1	6	23	1	3	0	0	0	53
隣室型	13	3	1	2	-	-	4	0	-	23
居間介在型	2	-	-	-	0	1	0	4	-	7
隣廊型	-	-	-	-	7	0	-	-	2	9
廊下介在型	-	0	2	0	0	1	0	0	0	3
その他	0	0	0	0	2	0	0	0	0	2
対象外	0	1	1	1	1	0	0	0	0	4
合計	34	5	10	26	11	5	4	4	2	101

表一 長子室部屋割り理由「離す」事例における親と長子の寝室位置関係

	3新A	3岩P	3岩Q	3新A	4共B	4伝A	4大A	4池A	4堀A	合計
同室型	0	0	7	5	2	0	0	0	0	14
隣室型	22	5	9	9	0	0	0	0	-	45
居間介在型	20	-	-	-	3	10	4	3	-	40
隣廊型	-	-	-	-	0	0	-	-	2	2
廊下介在型	-	19	45	59	18	12	4	0	7	164
その他	0	0	0	0	0	1	0	0	0	1
対象外	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
合計	42	24	61	73	23	23	8	3	9	266

注)「その他」：居間等の就寝室以外の部屋を寝室としている住み方事例
「対象外」：アンケートに長子の部屋割理由が記入されているもので、家族型がB型であったりC型であったりする住み方事例。

たものである。

これをみると、以下のように整理できる。

「隣接」を選択した住み方事例では(表一1)。

- ① 隣室型を選択できる平面では、〈4池A〉は全例居間介在型としているが、多くの住戸平面では親と長子の寝室位置関係を隣室型としている。
- ② 隣室型を選択できない平面では、親と長子の寝室位置関係を隣廊型としている。

「離す」を選択した住み方事例では(表一2)。

- ① 3・4LDKを通して、親と長子の寝室位置関係を廊下介在型とする事例が多い。
- ② 多くの選択パターンが可能な4LDKでは、隣室型を選択した事例は皆無である。
- ③ 隣廊型か廊下介在型かのどちらかしか選択できない〈4堀A〉では、廊下介在型を選択する事例が大半である。

以上のことより、部屋割り理由の「隣接」は、親子の寝室を図一4に示した隣室型あるいはそれに近い関係にすることを意味しているものと思われる。

また、「離す」は単に親子が別々の部屋を確保できればよいというわけではなく、できるだけ廊下を介するような関係を確保することを意味しているものと思われる。

3. 寝室位置関係変化からみた住要求

次に、親と子供の寝室位置変化の実態から、0域の意味を考察する。考察対象は、前項の部屋割り理由の考察のうちの「隣接」に関係すると思われる、かつ3寝室目の影響を排除するために、親と子供が同室で就寝する段階から就寝分離をするまでの過程、すなわち就寝形態¹⁰⁾a系、b系、c系、g系(注10)、図一a)とする。また、考察対象住戸平面は、調査した17平面すべてとする。

3.1 親と長子の寝室選択可能パターンからみた平面類型

調査対象住戸の平面を、前述した親と長子の寝室位置選択可能パターン(図一4)で類型化すると、図一5のごとく、5つに類型化できる。すなわち、〈隣室型 and 廊下介在型〉、〈隣室型 and 居間介在型〉、〈隣室型 and

図一5 親と長子の寝室位置選択可能パターンからみた平面類型

居間介在型 and 廊下介在型〉、〈隣廊型 and 廊下介在型〉、〈居間介在型 and 隣廊型 and 廊下介在型〉の5平面類型である。

なお、以下親と長子が図一4の隣室型の位置関係で就寝している場合を隣室就寝型と呼び、同様に他の場合も、居間介在就寝型、隣廊就寝型、廊下介在就寝型と呼び、親と長子が同室で就寝している場合を同室就寝型と呼ぶ。

3.2 各平面類型における親と長子の寝室位置関係変化

各平面類型における親と長子の寝室位置関係とライフステージとの関係をまとめると以下のように整理できる。

〈隣室型 and 廊下介在型〉平面の場合(図一6.1)。

- ① ライフステージの初期段階では、同室就寝型に集中する。
- ② 中間段階では、この同室就寝型と隣室就寝型および廊下介在就寝型に分散する。
- ③ 最成長期になると、廊下介在就寝型に集中する。

〈隣室型 and 居間介在型〉平面の場合(図一6.2)。

- ① ライフステージの初期段階では、同室就寝型が大半を占める。
- ② 中間段階では、隣室就寝型が大半となる。
- ③ 最成長期では、隣室就寝型と居間介在就寝型とに分散する。

図-6.1 <隣室型 and 廊下介在型>の場合

図-6.2 <隣室型 and 居間介在型>の場合

図-6.3 <隣室型 and 居間介在型 and 廊下介在型>の場合

図-6.4 <隣廊型 and 廊下介在型>の場合

図-6.5 <居間介在型 and 隣廊型 and 廊下介在型>の場合

図-6 親と長子の寝室位置関係変化

<隣室型 and 居間介在型 and 廊下介在型>平面の場合 (図-6.3),

① ライフステージの初期の段階では、同室就寝型が大半を占める。

② 中間段階では、同室就寝型がやや多いものの、この同室就寝型、居間介在就寝型、廊下介在就寝型の3つに分散する。

③ 最成長期では、居間介在就寝型が一部にみられるものの、ほぼ廊下介在就寝型に集中する。

<隣廊型 and 廊下介在型>平面の場合 (図-6.4),

① ライフステージの初期の段階では、同室就寝型が大半を占める。

② 中間段階では、隣廊就寝型、廊下介在就寝型の2つに分散する。

③ 最成長期では、廊下介在就寝型に集中する。

<居間介在型 and 隣廊型 and 廊下介在型>平面の場合 (図-6.5),

① ライフステージの初期の段階では、居間介在就寝型

もみられるが、同室就寝型が大半を占める。

② 中間段階では、廊下介在就寝型が他をやや上回る形で、同室就寝型、居間介在就寝型、隣廊就寝型、廊下介在就寝型の4つに分散する。

③ 最成長期では、廊下介在就寝型に集中する。

以上の各平面類型における親と長子の寝室位置関係変化を通してみると、共通する変化傾向が読みとれる。すなわち、ライフステージの初期段階では同室就寝型が大半を占める。最成長期では、廊下介在就寝型が選択できない平面を除き、廊下介在就寝型が大半を占める。さらに、初期段階と最成長期の間は、O域内で実現できる隣室就寝型や居間介在就寝型およびこれらの型と類似した隣廊就寝型等、部屋割り理由でみた「隣接」を窺わせる就寝型が選択される。

4. O域・K域でみた親子寝室の位置関係

最後に、親と子供の寝室の位置関係とライフステージとの関係を、O域・K域を指標にみることにしたい。具体的には、K域の中に1つも就寝室が無い<3新A>と、逆にO域の中に1つも就寝室がない<4堀A>を考察対象から除き、図-7のごとく、残りの住戸平面を、K域に就寝室が1室しかない平面(K域1就寝室と定義)、O域に就寝室が1室しかない平面(O域1就寝室型)、O・K域の両方に就寝室がそれぞれ2室ある平面(O・K域各2就寝室型)とに分け、この平面型別に親と子供の寝室位置関係変化をみることにする。

なお以下、親と子供の寝室位置関係を、親の寝室がO域にあり、子供のそれがK域にある場合、これを「OK型」と表し、「KO型」「OO型」「KK型」等も同様の意味をもつものとする。

4.1 就寝分離した親と長子の寝室位置

ここでは、就寝分離は完了しているが、就寝分解に至っていない住み方事例、就寝形態で言えば、b系、c系、

図-7 O・K域内の就寝室数でみた平面型

g系(注10), 図—a)を考察対象とする。前述したO・K域の中にある就寝室数で分類した平面型別に, 親と長子の寝室位置関係とライフステージの関係を整理すると, K域1就寝室型平面では(図—8.1),

① ライフステージの初期の段階では, 「OO型」が他二者を上回る。

② 最成長期に近づくほど, 「OO型」が減少し, かわりに「OK型」が増大する。

O・K域各2就寝室型平面では(図—8.2),

① ライフステージの初期の段階では, 「OO型」が大半を占める。

② 家族が成長するとともに, 「OO型」が減少し, 他三者が増加する。この三者の内, 最も増加するのは「OK型」であり, 「KO型」がこれに続く。

O域1就寝室型平面では(図—8.3),

① 「OO型」が選択できないこの平面では, 「OK型」と「KK型」がライフステージの多くの段階で同じような値を示す。

以上のように, 就寝形態b・c・g系においては, 「OO型」を選択できない平面を除いて, 親と長子の寝室位置関係は, 家族成長とともに「OO型」から「OK型」へ変化することが共通してみられる。

4.2 就寝分解後の親と子供の寝室位置

ここでは, 就寝分解後の住み方事例のうち, 最も単純な家族構成である就寝形態e系でかつ4人家族の住み方事例(307事例)を対象とする。また, 親と長子, 親と第2子の寝室位置関係を, 4.1と同様, 「OK型」等で表すこととする。

なお, 図中に使用されているCb', Ci'等の「'」印の

ついた家族型は, 第2子の年齢で換算した家族型である。

上記した考察対象住み方事例を, 親と長子, 親と第2子について寝室位置変化とライフステージの関係をみても, 明確な傾向は読めない(図略)。そこで, 第1報で述べた分解時期と関係深い子供の性別に着目し, 子供の性別と絡めて寝室位置とライフステージの関係をみることにする。

図—9は, 考察対象住み方事例を, 2人の子供の性別の組合せで, 親と子供の寝室位置関係変化をみたものである。すなわち, mf型とは長子が男子で, 第2子が女子である単純家族を示し, fm型, mm型, ff型も同様の意味をもつ。

以下, この性別による型別に, 親と子供の寝室位置関係変化をみる。

mf型では(図—9.1~9.2),

① 親と長子(m)の寝室位置関係は, 家族成長とともに, 「OO型」が減少し, 「OK型」が増大する。

② 親と第2子(f)の寝室位置関係は, 長子の場合と

図—9 就寝分解後における親と子供の寝室のO・K域上の変化

は逆に、「OK 型」が減少し、「OO 型」が増大する。

fm 型では (図-9.3~9.4),

① 親と長子 (f) の寝室位置関係は、家族成長とともに、「OK 型」が減少し、「OO 型」が増大する。

② 親と第 2 子 (m) の寝室位置関係は、家族成長とともに、「OO 型」が減少し、「OK 型」が増大する。

mm 型では (図-9.5~9.6),

① 親と長子 (m) の寝室位置関係は、家族成長とともに、「OO 型」が減少し、「OK 型」が増大する。

② 親と第 2 子 (m) の寝室位置関係は、mf 型の第 2 子 (f) の場合と異なり、一定の傾向を示さない。

ff 型では (図-9.7~9.8),

① 親と長子 (f) の寝室位置関係は、家族成長とともに、「OK 型」が減少する。

② 親と第 2 子 (f) の寝室位置関係は、「OK 型」が減少し、「OO 型」が増大する。

以上のことをまとめると、親と子供の寝室位置関係変化の傾向は、長子、第 2 子という家族内の構造より、子供の性別と大きくかわっているものと思われる。すなわち、男子の場合、mm 型の第 2 子を除いて、長子、第 2 子とも、親と子供の寝室位置関係は、家族成長とともに「OO 型」が減少し、「OK 型」が増大する。また、女子の場合、mf 型、fm 型、ff 型のすべてにおいて、家族成長とともに、男子とは逆に、「OK 型」が減少し、「OO 型」が増大する。

男子の場合、家族成長に伴う「OO 型」から「OK 型」への変化は、前述した長子室の部屋割り理由の家族成長に伴う変化傾向や、子供が 1 人である場合の親と長子 (m) の家族成長に伴う寝室位置関係変化の傾向 (図-10.1) と一致することより、親と子供の寝室位置関係に関する住要求の表れと考えられる。

一方、女子の場合の家族成長とともに起こる「OK 型」から「OO 型」への変化は、前述した家族成長とともに変化する長子室の部屋割り理由の変化傾向や、子供が 1 人である場合の親と長子 (f) の寝室位置変化傾向 (図-10.2) と一致しない。また、O・K 両域にそれぞれ 2 就寝室ある <4 共 B> <4 伝 A> を対象に、性別の影響のない mm 型、ff 型の長子と第 2 子の寝室位置変化を

図 10.1 男子の場合

図 10.2 女子の場合

図-10 就寝形態 8 系における親と長子の寝室の O・K 域上の変化

図-11 mm 型と ff 型における長子と第 2 子の寝室位置変化

みると (図-11), 2 人の子供寝室とも K 域とする住み方事例は、家族成長とともに減少する。これらのことを考え合わせると、女子の場合の家族成長に伴う「OK 型」から「OO 型」への変化は、寝室位置に対する住要求の表れと考えにくく、男子・長子の存在による影響の結果と思われる。

また、O・K 両域にそれぞれ 2 就寝室ある平面で、かつ 2 人の子供が同性であっても、2 人の寝室を O・K 両域に分散する形で 2 室を確保する事例が多く、家族成長が進むほどその割合が高くなることは、K 域内に 2 就寝室ある平面が就寝分解事例における就寝位置関係要求に十分応えていないことを示しているものと思われる。

5. まとめ

以上のことをまとめると

① 長子寝室の部屋割り理由は、ライフステージの初期の段階では「南側」「和洋」「隣接」が、最成長期では「和洋」「離す」が上位を占める。

このうち、「隣接」は、親と子供の寝室を隣室型 (図-4) あるいはそれに近い位置関係にすることを、また「離す」は単に親と子供の寝室を別々に確保できればよいのではなく、できるだけ廊下を介するような位置関係で 2 室を確保することを意味しているものと思われる。

② 分解事例を除いた住み方事例を対象に、親と長子の寝室位置とライフステージの関係をみると、家族成長とともに、両者の位置関係は、同室就寝型から隣室就寝型、居間介在就寝型へ変化し、最成長期に近づくほど、廊下介在就寝型に集中する。

③ 就寝分解後の住み方事例を対象に、親と子供の寝室位置関係とライフステージの関係を O・K 域を指標にみると、男子の場合、家族成長とともに「OO 型」から「OK 型」へ変化し、女子の場合、「OK 型」から「OO 型」へ変化する。

このうち、女子の変化は、女子の寝室位置に対する住要求ではなく、男子・長子の影響による結果と考えられるばかりでなく、仮説ではあるが、K 域に 2 就寝室ある平面が就寝分解事例における就寝位置関係要求に十分応えていない結果によるものであると思われる。

④ 親の寝室位置は、就寝分離・就寝分解の時期を通じて、O 域とされる。

以上、本報では、子供が就寝分離・就寝分解していく過程で、就寝室が単に不足することのないように用意されればよいということではなく、確保される親と子供の寝室位置関係が重要であることを示した。

親と子供の寝室位置関係は、就寝分離した事例では、ライフステージの初期段階から中間段階にかけては、親・子供ともO域を、中間段階から最成長期にかけては、親はO域、子供はK域が要求される。また、就寝分解後の子供の寝室位置はおおむねK域が要求されるが、K域内の就寝室の数、子供の性別等により、O・K域を使い分けることで要求が満たされており、O・K域概念を把握することが住戸平面計画に多くの示唆を与えることを示した。

次報では、本報で提案したO・K域を非就寝系行為で分析し、非就寝系行為にとってのO・K域の意味を考察する予定である。

注

- 1) 住戸規模と部屋数の関係については、ハウジング・スタディ・グループ、代表鈴木成文「日本と韓国の住居の近代化過程の比較考察—住様式の持続と変容—」(住宅建築研究所報 No.13, 1986.)で、韓国では住戸面積が増大してもチムシル(寝室)の数はせいぜい3~4室どまりであり、日本と異なる傾向をみせることが報告されている。
- 2) 個室の分断化・閉鎖化については、鈴木成文「住文化の持続と変容—計画の立場からの日本住居現代史—」(住宅総合研究財団研究年報 No.15, 1988.)の「14. 文化の力と計画の役割」の中で、計画の目標像の1つとして、「子供の個室の閉鎖化・分断化に歯止めをかけ、家族統合を促す空間構成を探索すること」が挙げられている。
- 3) 第1報とは、「集合住宅の住戸平面と就寝分離・分解の時期—ライフステージによる住み方変化の研究1—」(日本建築学会計画系論文報告集, No.422, 1991.4.)を指す。本報も、この第1報で定義したと同様、子供が親から独立して就寝することを就寝分離と、また子供どうしが独立して就寝することを就寝分解と定義する。
- 4) いわゆるnLDK平面のnに相当する部分を就寝の場として使用しているか否かにかかわらず就寝室と、就寝室の内、実際に就寝の場として使用している部屋を寝室と呼ぶこととする。
- 5) 公私室型平面が、現在どのような平面を指すのか定かでないが、本報ではこの言葉を比較的早く使用した論文「住空間の型、新建築、1959.5、西山卯三」の定義、すなわち「住宅の中心であるリビング(居間)がある住宅であり、この公室(リビング)をとりまいて、各々隔離された寝室がある住宅」に従う。よって、他の私室を介してしか行けない私室があるものは公私室型としないが、公室群と私室群が動線上明確に分離されていなくても(居間等の室を介してしか私室に行けない動線があっても)、これも公私室型平面と呼ぶ。
- 6) 調査対象住戸の南面2室型3LDK平面住戸の内、LDKの南側に2つの就寝室が配置されている住戸平面がある。この平面のLDKのように、直接外気に接することのな

いLDKを行燈LDKと呼ぶ。また、南面3室型3LDK平面住戸の中には、LDK合わせて10畳のLDKがある。本報ではこれを狭小LDKと呼ぶ。

- 7) 鈴木成文「集合住宅 住戸(建築計画学6)」(丸善, 1971.)の5章の「3室住宅における食寝関係」には、寝室分解の難易の差は、主に副寝室の条件の良否によることが述べられ、例として、南向きであること、食事室にならぬこと、タタミ敷きであること、玄関に直接面さないこと、主寝室とのつながりが密であること等を挙げている。6章の「公営アパートにおける食寝関係」には、寝室の分解の難易は、主室と副室との条件の相対的關係によって決まり、副室の条件が良、主室のそれが悪いことは共に分解を促すことが報告されている。
- 8) 住み方事例数とは、住み方変化(アンケートでは寝室の数、位置、家族人数いずれか1つでも変化することを住み方変化と定義)が起こった前後それぞれの住み方に、家族内での住み方変化の起こらなかった場合も家族型ごとに1つの住み方事例とみなし、これを加えたものである。
- 9) Co, Cb, Ci...等で表されている家族型は、研究者によりその意味内容が異なる場合がみられる。本報では、Coを主婦が40才未満の場合とし、Co+を同40才以上とする。また、一般の家族型の分類にはないCk4とは長子が15~17才の単純家族を指し、Cmfとは子供の数、性別にかかわらず長子が18才以上のものを言う。
- 10) 本報では、第1報と同様、Cc, B, S, Co, Co+, および主人別室就寝型(母親と子供は同室で、父親が別室で就寝する型)を除いた住み方事例を対象に、だれとだれとが同一の部屋で寝ているかをパターン化した就寝モデルをつくり、これに基づき、就寝分離・分解を考察する。以下に、この就寝組合せモデルの図(図-a; 第1報より転載)と、その家族型との関係を整理した表(表-a; 同上)を記す。

図-a 就寝組合せモデル

表-a 就寝形態と家族型(3LDK+4LDK)

		(事例数)											合計
		Co	Cb	Ci	Cl	Qk1	Qk2	Qk3	Qk4	Caf	Cor	714	
1 個室型	a1+a2+a3	0	120	120	67	18	5	0	0	0	1		331
	b2+b3	0	3	8	26	23	18	9	1	0	1		89
	c2+c3	0	6	55	102	106	65	19	9	0	4		368
	a1	0	13	14	33	37	37	42	53	0	2		231
2 個室型	M別居型	0	20	25	25	17	20	16	18	1	1		150
	d3+d4	0	0	0	3	12	17	18	13	0	0		64
	b4+c3	0	0	0	2	2	7	4	1	0	0		16
	e2+e3	0	0	2	8	47	100	106	82	0	0		354
3 個室型以上		104	-	-	-	-	-	-	-	60	1		165
	子供なし	0	1	2	2	2	1	0	0	0	0		8
	就寝室以外に就寝	3	2	2	0	1	1	1	2	0	1		13
	不明												
合計		107	174	228	270	267	268	219	177	61	17		1789

本論文に関する既発表論文

- 1) 笠嶋 泰, 今井正次, 松本壮一郎, 前田幸則: 南面 2 室型 3LDK 住戸における住み方の変転, 日本建築学会東海支部研究報告 25 号, pp. 329~332, 1987. 2.
- 2) 笠嶋 泰, 今井正次, 松本壮一郎, 前田幸則: ライフステージと寝室位置—4LDK 住戸における住戸内生活の変容に関する研究②—, 日本建築学会大会学術講演梗概集, pp. 173~174, 1987. 10.
- 3) 笠嶋 泰, 松本壮一郎, 今井正次: 南面 3 室型 4LDK 住戸における住み方の変転—共和 4LDK を中心として—, 日本建築学会東海支部研究報告集 26 号, pp. 401~404, 1988. 2.
- 4) 松本壮一郎, 笠嶋 泰, 今井正次, 前田幸則: 住居内のオープン域・隔離域に関する研究 1—就寝形態からみたゾーニング—, 日本建築学会大会学術講演梗概集, pp. 109~110, 1989. 10.
- 5) 笠嶋 泰, 今井正次, 松本壮一郎, 前田幸則: 住居内のオー

ブン域・隔離域に関する研究 2—育児・就寝からみた 3 つのライフステージとの関係—, 日本建築学会大会学術講演梗概集, pp. 111~112, 1989. 10.

- 6) 今井正次, 笠嶋 泰, 松本壮一郎: 3~4 就寝室型住居平面と分離分解時期, 日本建築学会近畿支部研究報告集 30 号, pp. 281~284, 1990. 5.
- 7) 笠嶋 泰, 今井正次, 松本壮一郎: 親子寝室の位置関係に関するライフステージ上の変化—オープン域の提案—, 日本建築学会近畿支部研究報告集 30 号, pp. 285~288, 1990. 5.
- 8) 笠嶋 泰, 今井正次, 松本壮一郎: 集合住宅の住戸平面と就寝分離・分解の時期—ライフステージによる住み方変化の研究 1—, 日本建築学会計画系論文報告集, No. 422, 1991. 4.

(1991 年 3 月 10 日原稿受理, 1991 年 8 月 12 日採用決定)